

## 第二十一回 純黄賞選考資料抜粋

### 印出美由紀推薦

○鋭敏で美的な感性。飛躍した発想。練られた表現。音楽、絵画など芸術への造詣が、作品を豊かなものになっている。入会後の研鑽が著しい。

○日常生活のレベルではつらく思われたり、負の感情にとらわれていても、それを短歌の表現に引き上げる優れた手腕の持ち主といえる。

○知的な作風で、言葉の選び方に個性が感じられる。興味関心の幅が広く、見慣れた世界に新たな視点を与えてくれるような歌が多い。

○旧仮名遣いで漢語を駆使した骨格のしつかりした作品を詠む。古今の芸術に通じ、そこから発信される歌は格調高く、イマジネーション豊かである。

○比喩を交えての自然観察の描

写に巧みがある。細部を見逃さず、しつかり掴み取っているからだ。見立ての組み合わせに独自性があり個性的である。

○芸術、自然などさまざまな題材を詠み、知的世界を優艶に表現する。身近な出来事も、比喩を通して詩的な世界へと展開する技に優れている。

○対象を細やかに観察し、感じられたものを想像力をふくらませ知的に処理し詩へ昇華させているのが良い。

○単語の使い方の巧みさ。心を語りすぎることなく感覚のするどさ、あざやかさで場面を掴む力を感じます。

### 永田恵美推薦

○話し言葉を自在に使いこなしながら、周囲の事象に注がれるいくぶんシニカルで軽やかな視線が、独自の魅力をもたらし

第二十一回純黄賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦文は○印が一人分、推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を前のほうに掲載してある。

### 推薦作品抄

#### 印出美由紀（第二十一回純黄賞）

グールドの連打のやうな木枯らしにけやきの梢（みづのえ）のもみち耐へをり  
出棺を見送りてのち聖堂に小舟のごとき日だまりのあり  
瞳孔をひらかれしまま眼科出で千軍万馬のひかりに庄さる  
熱帯夜の沼の底なる六畳間杉の柱がみしつと鳴りぬ

晩夏の大きくすのきをとほりくる風の秀先に猫がねてゐる  
混沌（まごころ）の地をめぐりて帰り来るねこのせなかの模様の銀河  
等伯の夭折の子のさくらばな胡粉の白にひいやりとあり  
冬空で大縄跳びをするやうに飛行機雲をまたぐ群鳥

刈り込みし黄金葛（きんご）の蔓の切り口のひとつひとつがしづくを湛ふ  
朱の実はからすに嘸（な）まれ恍惚としてひさかたの空わたりあむ  
目葉をまなこに湛へしばらくはひとつみづうみ抱くごとをり  
ひとつ音残しひとつの花落ちてつばき一樹はふかき森なり  
エッチングの細く彫られし描線のしづけさに似るま冬のけやき  
たつぷりと雨を降らせた雲は今朝しろい帽子になりとほざかる  
落ちさうで落ちぬポトスのしづくには涙のかたちのキッチン映る  
オペのち眠る時間は太古より埋もれしままの丸木舟めく  
人を載せギョットないて人ざらひだつたかも知れぬ遊動円木

いる。

○一首をドラマ仕立てて詠む。平易言葉を使いながら、時に語割れ・句跨りなど韻律に揺さぶりをかけることで作品に奥行きを与えている。

○言葉への関心が高く、歌を紡ぐ上での力と技になっている。リフレインが巧みで、オノマトペの効果を生む。擬人化を生かし自然の景を掴み取る。

○自身を深く内省し人生や命を俯瞰するように捉えているところに親しさを感じる。

○目の前に情景の浮かぶ歌が印象的である。現実の景色を詠んでいると思うが、くらくたとするような、異界に迷い込んだかのような瞬間が心に残る。

○生きることへの諦念を滲ませつつ、歌の中に、抒情性の強い詩的世界を生み出していることを高く評価したい。文学的素養を感じさせる歌も良い。

○世の中と自己との小さな違和と日常に潜む澁のようなさびしさを丁寧に掬い取る。命を見つめる眼差しが深く、暗さがない。

### 荒川ゆみ子推薦

○日常のなかにある微かな齟齬

を、やわらかな言葉でつぶやくように詠う。口語を使いながら軽くならず、身辺の素材を詩に昇華させるのが巧い。

○穏やかな家庭生活の中から詩情を汲み取っていて、作品にはおおらかで温かい人柄がにじみ出ている。素材の幅を広げようとする試みもある。

○題材の取り合わせがユニークで説明的になることがない。対象を丁寧に詠むことにより、逆に読み手の想像力をかきたてるところがある。

○日常のなかの小さな気づきが作者の感性を通してすくいあげられ、差し出される。作者の気づきを読者に納得させる十分な力がある。

○なんといいつても、比喩がすばらしい。直喩、隠喩どちらも非常に魅力的である。作者の暮らしのなかの、かすかな違和感のようなものが詠まれていて惹かれる。

### 高橋みどり推薦

○教職を定年退職し、九月には念願のイギリス留学を果たす。

大きな変化のあった年で、湧きおこる感慨を多面的に掬い取り、

### 永田恵美

猫だつて液体になる春の日にただの固体で空を見てゐる  
折鶴の羽根を上手に折れぬまま多分終はつてしまふ今生  
万人がサテイの曲を好きだつて思ひ込んでる人と話した  
二月には二月の光彼方から降りくる銀の薄紙のあり  
ひとツツジふたツツジと食べ尽くし花喰ひ鬼が春を連れ去る  
不意に開くどこかに続く自動ドア入つてみようか夏の午後だし  
信号がずつとずつと向かうまで向かうまで赤い夕暮れの道  
「ヤバイ」とは良くない言葉だつたのに多分私は褒められてゐる  
満月が白く冴えゐる冬の夜は李白の絶句を本に探しぬ  
真夏日は中森明菜と強炭酸だれの文句も受けつけないわ  
肩先の枝毛をいつも気にしてたことしか思ひ出せない級友  
この街が好きだ私をいつまでも異邦人であらせてくれる

### 荒川ゆみ子

雨に濡れた紙の袋の心地して今日は何かを容れたら壊れる  
留鳥のやうに東京に暮らすけど春は渡りをしてみたくなる  
曇天にひまわり咲きぬカーテンを閉めてる部屋の灯りみたくに  
雲だつた水を沸かして初風呂呂に入れば足がゆるんと浮かぶ  
あたたかい光の昼はペランダにしゃがみしばらく亀となりたり  
ドアノブに冬の乾いた棘生えて裸の指を強く刺したり  
生徒らの開いた傘が控へぬ（個）を見せながら朝の道来る  
丈低くうつむいて咲く純白のクリスマスローズの蕊はにぎやか

### 高橋みどり

わたくしを貫く三十八年の教職という芯棒を抜く  
英語ならどう訳すかとこんな日に気にしてしまう「御淋見舞」  
人気がなき朝のキャンパス疑問符のごとき尾を立て栗鼠の横切る  
困らせる恋をしている不器用な少女いつかのわたしのよう  
まだ知らぬ異国の冬もときめきの一つとなりて湯たんぽを買う

丁寧に詠んでいる。

○作品に生動感がある。作歌を  
楽しむ気持ち伝わり楽しい。  
教職退職後、留学のため渡英す  
るなど、アイデンティティーを  
模索し続ける姿勢がいい。

○留学を前にした期待と不安。  
小さな心の揺れを、目に見える  
なかに託していいいに詠う。  
日常に題材を見つけて詩的に詠い  
あげる力がある。

○教員生活を終える間際の日々、  
そして留学という夢の実現を印  
象深く詠んでいる。また母と娘  
との絆を考えさせる歌には、心  
を打たれる。

### 人見江一推薦

○奇をてらわず、淡々と日常を  
歌に刻みながら歌作りを楽しん  
でいる。歌の中に長い時間感覚  
があり、生きる喜びが伝わって  
くるのがよい。

○日常をさらりと詠んでいるが、  
素材や発見が面白く、心惹かれ  
る。ノスタルジーを感じる歌が  
多い。

### 丸山克介推薦

○南国の風土を背景として詠わ  
れる歌には力があり、骨太の生

活詠とそこはかとないうーモア  
が魅力的である。

○老いの心境をユーモアを混え  
て歌う。暗くなりながら高齡者  
の生活を明るく軽やかに歌って  
いるのが良い。男性ならではの  
視点がある。

### 高山幸子推薦

○季節の巡りや家族のことなど  
穏やかな日常を静かに見つめる  
ところから、短歌には珍しい素  
直で自然な幸福感が立ち上って  
くる。

○常に郷土の自然や日々の生活  
に目を向け大切にしながら詠む  
様子が作品から感じられる。

### 北祐二郎推薦

○日常のさりげない情景や風景  
を詠んでいるのだが、歌の中に  
物語が感じられる。歌の調べが  
美しく、読んだあとと静かな余韻  
が広がっていく。

### 大池アザミ推薦

○人間だけが持つさまざまな感  
覚に詩を見出だす人。日常の光  
景でありながら、作者固有の眼  
によってユニークな作品となっ  
てゆく。そこが面白い。

母ひとり子ひとりの子を泣かせたる母なり我は「やばいボンコッ」

### 人見江一

コンビニの無かった頃を思い出す角のパン屋でだいたい済んだ  
コーヒーとタバコの匂うジャズのお店狭く急なる階段下る  
旅先の消息伝える絵葉書を挟んだままの古本を買う

○白秋の享年とうに越してからゆるり始める歌を詠むこと  
産み終えて大き甲羅を引き摺って海へと帰る母うみがめは

### 丸山克介

鳥中を守るごとくに海に向き空に向き咲く鉄砲百合は  
レントゲン検診車はや去り行けり「結果はあとで」と尻を振りつつ  
床も壁も柵も便器も磨きあれど花一輪なき男性トイレ  
八十の吾が人生を占ふや今朝の湯飲みに茶柱の立つ  
実の何個この台風に耐へ得るや庭の柿の木激しく揺るる

### 高山幸子

ほおずきを舌に転がし鳴らしたる日のはるかなり盆花に活く  
秋の日が斜めにすうつと差す森に樞は音もなく金貨ふらせ  
目ざすのはコロレットフォンデユのなめらかさ今年も夫が挑む代掻き  
あさぞらを一直線にひこうきも伸びて天より秋ははじまる  
春の野をいのちが走る出くわして目の合いしテンまつしぐらに逃ぐ

### 北祐二郎

リラ冷えの丘のバス停海光の驕りに風の遅速を見たり  
満ち潮に遅れて集く海鳥の啼きごゑ風にあらがふごとし  
瞬きの刹那遅るる砂時計星屑ひとつ紛れてゐたり

### 大池アザミ

勘違いされてるままに会話してくずれぬようにそつと立ち去る  
雑草が凶暴になる真夏日はぴくりと動くこともおつづく